

子どもの育ちをめぐるさまざまな課題が山積する昨今、保育園や幼稚園、保健センター、療育センターなど子育て支援場面における気になる子どもの早期発見、早期支援が、ますます重要性を増している。しかし実践の場で子どもの「かかわりの特徴」を簡単に把握し、支援に生かす方法は、必ずしも適切なものが存在しない。

子どもの社会能力の発達には、さまざまな「個性」がある。これら個性を十分に発揮する環境を整備するとともに、「子どもの社会能力」および「かかわりの特徴」を日常的な場面で評価し支援に活用することは、実践においてきわめて意義深い。

本指標は、国際的に社会能力の構成要素として最も広く活用されている「自己表現 (assertion)」「自己制御 (self-control)」「協調 (cooperation)」の枠組みを用い、追跡調査により信頼性と妥当性が明示されたツールである。文部科学省科学技術振興機構のコホート研究や、厚生労働科学研究などの研究領域をはじめ、保健、医療、福祉、保育、心理、教育などの実践領域での活用実績がある。

また実践でのさらなる活用を意図し、観察法の「かかわり指標」との妥当性を確認した質問紙法の「幼児用社会的スキル指標」を紹介した。

本指標は、子育て支援に携わる専門職、研究職、行政職、学生が、下記のような実践、あるいは研究、学習のツールとして容易に活用できる。

- 1) 専門職が子育て支援として子どもの社会能力やかかわりの特徴を把握し、支援に活用する実践ツール
- 2) 研究者が研究に活用する標準化された評価ツール
- 3) 学生が子育て支援についての技術を取得する学習ツール

本書は大きく3つの柱より構成されている。1) 意義と実施方法、2) 科学的な根拠、3) 具体的な実践例、である。

<意義と実施方法>では、「第1章 気になる子どもの早期発見・早期支援と「かかわり指標」活用の意義」で発達の視点および医学的視点で捉えた気になる子どもの特徴、早期発見、早期支援に向けた「かかわり指標」活用の意義と特徴、理論背景、「第2章 「かかわり指標」の内容」は枠組みと評価項目、さらに「第3章 実施方法」でさらに詳細に実施方法と具体的な評価基準を紹介した。

<科学的な根拠>では、「第4章 科学的な根拠」をさまざまな研究成果をもとに整理した。さらに「第5章 質問紙を用いた気になる子どもの早期発見：「幼児用社会的スキル指標」としてさらに実践での活用が容易な質問紙法を紹介した。

<具体的な実践例>では、「かかわり指標」を用いた早期発見、早期支援の具体的な方法とポイントを自閉症傾向、広汎性発達障害傾向、注意欠陥多動性障害傾向、知的障害傾向、虐待傾向の事例をあげて解説した。巻末には「かかわり指標」、英語版の「かかわり指標」、活用方法、「幼児用社会的スキル指標」に関する情報を添付した。今後さらにさまざまな実践領域、ある



いは国際比較研究等での活用が求められる。

「かかわり指標」は、子どもの社会的な相互作用の質を短時間の行動観察により客観的に測定できるという点において、他に類を見ないツールであり、さまざまな発展の可能性を秘めている。

根拠に基づく子育て・子育て支援の展開に向け、実践の場で早期発見、早期支援につながる有効な評価指標として、あるいは研究ツール、学習ツールとして、「かかわり指標」の今後の活用が大いに期待される。

---

筑波大学大学院人間総合科学研究科 教授 あんめ とときえ 安梅 勅江